

# 今日のアラスカ登山「エクストリームアルピニズムの実験場」

横山勝丘 (信州大学山岳会)

## 1. はじめに

2005年4月から5月にかけてのアラスカ登山は、私と、パートナーである一村文隆(東京YCC)にとって非常に有意義な経験であった。予想以上に充実した登攀となり、ハンティントン(3,730m)南西壁の新ルートと、デナリ(6,193m)南西壁デナリダイヤモンドの第三登を記録することができた。一方で、アラスカ初見参の我々は、満足よりも自分たちの足りない部分を多く曝け出す結果となったのも事実である。それは、自分自身のクライミングの内容に関してだけではなく、欧米人クライマーのクライミングを目の当たりにした時、より一層強く感じられることとなった。

現在ヒマラヤで活躍する超一流のアルパインクライマーは、それ以前にアラスカで目覚ましい記録を残しているのである。彼等に共通しているのは、ヒマラヤで実践するクライミングの内容がヒマラヤ独自のものではなく、アラスカでのクライミングの延長線上である事だ。当然アルパインスタイルであるし、一口にアルパインスタイルと言っても、「より困難」を追求したものである事は見逃せない。ヨーロッパアルプスの登り方をアラスカに持ち込み、それを熟成させ、ヒマラヤで実践する。これが当たり前のように行なわれ始めた。2005年夏には、スティーブ・ハウスらによってナンガパルバットのルパール壁がアルパインスタイルで新ルートから登られた。一つの金字塔となるであろうこの登攀には、それまでのヨーロッパアルプスやアラスカでのクライミングの実践が土台にある

ことは間違いない。

拙いクライミング経験しか持たない私だが、ここでは自分達のアラスカにおける記録を簡単に記し、自分の感じた課題、アラスカの登り方を考えてみたい。

## 2. 登攀記録

Huntington Southwest Face New Route

SHI-SHI (志士)

April 22, 2005 (22hours round trip)

ALASKA GRADE4 AI5, M5 1800m

当初はファントムウォールを登る予定でいたが、隣のラインの方が、より氷が多く楽しめそうだったので、ルートを変更した。

トコシトナ氷河のBCを4時発。西稜のコルから1ピッチ懸垂を交えて南西壁側(死の谷)へクライムダウンする。7時登攀開始。ファントムウォールと同じ50°の氷雪壁を800mコンテで進む。1ピッチ急な凹角を登り、再び雪壁をコンテで南稜に向かって一直線に右上する凹角に入る。ここでファントムウォールと分かれる。凹角は最大90°、氷は概して薄く、摂理の少ない花崗岩のため、プロテクションはかなり悪かった。しかし、快適で面白い登攀を楽しむことができた。AI5, M5。450m登り、13時に南稜合流。南稜を非常に疲れるアイスクライミングで山頂へ。途中一ヶ所20mのセラック越えで、出だしのみ95°。下降は西稜に取ったが、これも苦勞させられた。クライムダウンを交え、懸垂20回ほど。BCを発ってから22時間後の2時、BCに帰着した。

## 2. リポート

登攀ラインは非常に目立つ所に位置しているので、もしかしたら既に登られているかもしれないが、手持ちの資料では記録は見られなかった。新ルートと言うよりは、ファントムウォールのバリエーションと呼ぶべきかもしれないが、ラインは非常に美しく、面白い登攀が行なえる。

### Mt.Denali Southwest Face Denali Diamond 3<sup>rd</sup> Ascent

May 19~23, 2005 ALASKA GRADE6

AI5, M7, 5.7 2500m

5月5日、カヒルトナ氷河に入り、2200m地点にBC建設。ウエストバットレスで順応を済ませず、一週間の天候待ちを余儀なくされる。18日、ようやく好天周期が訪れたようなので、北東カヒルトナ氷河を詰め、南西壁基部にABCを建設した。

19日(登攀初日)、氷壁(60°, 出だし85°)を3ピッチ後、氷と雪に覆われた浅い凹角に入る。上部に行けば行くほど傾斜はきつくなる。岩と氷のミックスメイクで、M6+まで。12ピッチ登り、氷を削ってオープンビバーク。

2日目。ビバーク地左の凹角に入り、4ピッチで「Boulder」基部へ。Boulder右の凹角に入り、3ピッチで核心である氷の詰まった大凹角の下まで。難しくはないが、アンサウンドな岩に手を焼いた。無理やり氷を削ってテントを張る。

3日目。大凹角を登る。ルートの核心。90°のセクションが随所に現われ、楽しい。最上部で氷は消え、完全なドライツーリングとなる。ここは初登ライン左の凹角にラインを取る。第2登パーティのラインと同じと思われる。AI5, M7。しかし、2ポイントでプロテクションにレストしてしまった。完全なオールフリーは次のパーティに委ねる(もしかしたら直後に登ったパーティによ

って為されているかもしれない)。夜遅くなって上部氷雪壁に出、4,800m地点でテントを張る。

4日目。氷雪壁をカシンリッジまで。雪が本格的に降り始め、5,400mまでとする。

5日目。カシンリッジをたどり、デナリ山頂に13時着。ウエストバットレスを下降し、BCに22時帰着した。

### 3. 登攀を終えて

意気揚々と帰国し、改めて様々な記録を読み漁っていると、高揚が急激に冷めてきてしまった。そこには、数々の凄まじい登攀の記録が記されており、自分達のクライミングがとても稚拙なものに見えてきてしまった(楽しかったかどうかは別として)。そしてこの時、アラスカにいる時から感じていたモヤモヤがはっきりと見えた。心残りが3つあったのだ。

- ① デナリダイヤモンド25ピッチ目で2ポイントのレストをしてしまった事
- ② 登攀スピードが圧倒的に遅かった事
- ③ デナリダイヤモンドで疲れてしまい、次の登攀が行なえなかった事

これら3つについて、思うところを挙げてみたい。

まず、①に関してだが、これは単に登攀技術の稚拙さと、度胸のなさに拠るものである。もう少し登り込んでいて、こういう類のクライミングに慣れていればオールフリーで行けたかもしれない。アルパイン=スピード命であるため、フリーにこだわるのは場所によっては時間を食って命題に背く事になる。そもそも、元来アルパインクライミングにおけるフリーというのはスピードアップのための手段でもある。つまり、フリーで時間がかかるのなら人工で登らなければならないのかもしれない。しかし、世界では現にフリーを意識した

ルートが拓かれているし、より良いスタイルで、ということを考えればフリーで登るのは素晴らしい挑戦である。クライミングという行為における「フリー」は、何事にも取って代わるほど重要なものであるはずなのに、アルパインクライミング≠フリークライミングという風潮が現代でもあるのはおかしな事だ。もちろん、その現場の状況次第では、そう悠長な事を言っていられなくなる場合も多々あるが。ともあれ、そんな世界の流れを感じる事のできるラインをフリーで越えたいという思いが強かったにもかかわらず、結果的には支点にぶら下がってしまった。きっと、強いクライマーならそのピッチを私よりも断然速いスピードでフリーで越えてゆくだろう。慣れた者にとってはフリーのほうが速いのである。

次に②に関してだが、これはまさに致命的な欠如である。時間をかける事によって、山から受ける外的危険は格段に増す事になる。致命的となる悪天候等が来なかったから良かったものの、様々な状況を考えると恐ろしい。これはアラスカではなく、その後のボリビアでの話だが、登攀に12時間を要して山頂に立った頃には下降に必要な明るさは残っておらず、山頂でのビバークを余儀なくされた事があった。ビバーク中、パートナーと「これは8時間で登らなきゃな」と話していたのだが、この8時間というのは、ただ単に自分達の登攀スピードの遅さに苛立ち、もし順応も完全で、もっと体力・技術があれば、そのくらいの時間で抜けられるだろう、という推測のようなものだった。しかし翌日、山頂からハイキャンプへの下降に要した時間は、まさに4時間であった。つまり8時間で登っていれば、その日のうちにハイキャンプまで下降する事は十分に可能であったわけだ。体の消耗、外的危険にさらされる時間の増大、そ

ういったことを考えれば、スピードはあればあるだけ良いという事になる。話をアラスカに戻すが、速いパーティであれば、我々と同ルートをハンティントンなら15時間以内、デナリも3日以内で登るだろう。記録上では、ハンティントンの1dayはそう多くは成し遂げられておらず、我々が2番目である可能性が高い。しかし、強いクライマーが本気で取り組めば簡単に成し遂げられるだろうし、我々が南稜に抜けてからの登攀スピードの遅さは、思い出しただけでも恥ずかしくなってくる。デナリにしても、我々の直後に第4登したパーティは、3日か4日で抜けているそうだ。

では時間を食った原因は何か。第一に、高所順応の不足が挙げられる。我々の5000m以上での登攀経験は浅く、自分自身の高所における体の変化を把握しきれていなかった。これに関しては、確実に順応を行なう事、自分の体がどれだけ高所に対応できるのかを把握する事以外に対処はない。第二に、登攀能力の低さである。例えばM6クラスのピッチが現れると、核心の下で過剰な支点を取ろうとしたり、一步踏み出すのに躊躇したり、その1ピッチに費やすエネルギーも増大してしまう。いかにランナウトで迅速にロープを延ばせるかが鍵だろう。登攀スピードのアップといえ、ビレー点での作業、やり取りでも大きな差が生じてくる。我々はノーコールビレーで登攀を行なっている。コール一つ伝えるのに多大な労力を要する事が良くあるが、我々は一切コールをしないので、これを軽減できる。慣れたパートナーとなら、そんなに難しい事ではないと思う。その他大きな壁では、パーティ毎の創意工夫が重要になってくる事と思う。第三に、ザックの重量である。ギアは致し方ないが(それでもかなり削っている)、食料は一日当たり1500kcalほど持っていった。これ

## 2. リポート

は本当にスティックに登攀を行なっている者の倍近い値ではないだろうか。また、寝袋も重くて劣悪なものを使用してしまった。1～2kgの違いが、フォローのユマーリングに大きな差を生む事になる。

今回の我々のクライミングは、記録上では「M7」や「AI5」といったグレードが示されているため、「モダンな」イメージが付きまとうかもしれないが、実は全くそんな事はない。ルートのは半分は氷雪壁であったり、雪の乗った嫌らしい岩をアイゼンと手袋で登るようなものである。確かにM7を登れる技術がなければ核心のピッチを越えるのに苦労するかもしれないが、それ以上に体力勝負なのである。話は逸れるが、日本人アルパインクライマーは、どちらかと言うと「何でもあり」で、フリーを意識していない、グレードが曖昧、といったイメージが付きまどっていた。それが嫌で、フリークライミングやスポーツミックスクライミングを実践し、(下手ではあるが)それを山の壁に取り入れる取り組みをしているのだが、最近様々なクライマーと話をしていると、逆に「フリークライミングやスポーツミックスクライミングが登ればアルパインが登れる」というような考えが見え隠れするのだ。これは明らかな間違いであって、それを生かせるだけの体力、スピード、そして経験がなければアルパインは登れるはずがない。今回我々が登ったラインに行ってみてもらえばわかるだろう。私は、「もっと冬壁を登っておけばよかった」「もっと山を駆け回っておけばよかった」そう思いながら登り続けた。

そして③についてである。アラスカ初見参で何を欲張りなことを、と思われるかもしれないが、デナリダイヤモンド登攀後にハンターのムーンフラワーバットレスを登れるだけの準備をして氷河

入りしたのは事実である。実際は、デナリダイヤモンドの天候待ちで時間を大幅にロスしてしまい、ハンターに行けるだけの食料がなくなってしまった。しかし、仮に食料があったとしても、デナリダイヤモンド後にハンターを登る力が残っていたかという点、甚だ疑問である。しかし、世界のトップクライマーは平気で3・4個の登攀を行なってしまう。それも、一つ一つが特筆すべき内容であるのだ。これも結局体力のなさに帰結してしまうのだが…。

### 4. アラスカで何が行なわれているか

現在アラスカで行なわれているクライミングには二つの流れがあると考えられる。

一つはスピードの追求である。これは、かつては1976年のチャーリー・ポーターによるカシンリッジ36時間に始まり、1991年にはマグ・スタンプによって同じくカシンリッジが4300mのキャンプから15時間でラウンドトリップされた。当然これらはシングルプッシュによるものであり、最近ではマーク・トワイトラ3人によってデナリ最難の南壁チェコダイレクトが60時間で登られているし、スティーブ・ハウスとローランド・ガリボッティによってフォーレイカーのインフィニットスパーがBCから頂上まで25時間で登られたりしている。普通なら一週間以上かかるこのルートをほぼ一日で登るのは、想像を絶する。これはまさしく、ヨセミテで行なわれているスピードクライミングのアルパイン版である。ヨセミテで活躍を続けるデイン・ポッターが、パタゴニアで素晴らしい登攀を成し遂げているように、驚異的なスピードをもってアルパインの壁に挑む行為が当たり前になっている。

もう一つの流れは、フリーでのトライ、フリー化である。当然、純粋なロッククライミングもこ

れに含まれるが、氷雪を多く纏ったアラスカの壁では、ミックスやウォーターアイスの高い技術が持ちこまれている。1997年にマーク・トワイトらによって登られた、ブラッドリーのギフトはWI7の登攀であり、スティーブ・ハウスをもってしても、3度の墜落を喫している。それまでであれば、人工に切り替えたり、ましてや墜落そのものがタブーであったかもしれない。しかし、彼らは明らかに山の壁でフリーを意識した登攀を行なっている。その後、ムーンフラワーバットレスはフリーで登られ、デナリダイヤモンドも第2登パーティによってほぼフリーで登られ、M7のグレードが与えられている。

私が麓のタルキートナにいた時、カナダ人の有名クライマー、ショーン・アイザックに出会った事があった。彼は我々にキチャトナ山群の写真を見せ、その可能性の大きさを熱く語ってくれた。現在最も進んだクライミングは、ビッグウォールとビッグウォールの間に食い込んだ非常に傾斜の強い氷のラインなのだそうだ。氷が繋がっていたとしても状態が非常に悪い事もあるし、繋がっていない場合もある。それを極力フリー、もちろんノンボルトで登るとというのが彼らのパーティのスタイルだ。彼はオールフリーで登れなかった事を悔やんでいたが、結果的には完登し、素晴らしいルートとなったようだ。アルパインクライミングの世界でも、フリークライミングの概念が急速に浸透しはじめている。そのうち、ハングドックやラッペルボルディングも持ち込まれるのだろうか。アルパインクライミングがあらぬ方向に向かうのは避けなければならないが、それも一つの発展の過程、可能性として試される事もあるのかもしれない。

スピードとフリー、元々は同じ所から出発して

おり、どちらかを追求するにはもう一つの能力が必要なのだが、レベルが上がればこういう形で二分化してくるのだろう。この二つの流れを融合した素晴らしい登攀が、2002年に成されている。マルコ・プレゼリとステファン・コッチによるデナリ南西壁のライト・トラベラーである。彼らはオンサイトで最高M8の岩壁を越え、標高差2500mの南西壁を51時間で完登、下山しているのだ。これらの記録はそれだけで完結させても十分に価値のあるものだが、一流のクライマーはそれをヒマラヤや他の山域で実践しているのだ。アラスカは山は大きい、アプローチが容易であるため、気軽に挑戦的な登攀を行なえるのだろう。高難度のフリークライミングがヨセミテ、そしてトランゴ等のビッグウォールに持ち込まれたように、オクトパシーに代表されるような高難度のアイス、ミックスクライミングがヨーロッパアルプスやカナディアンロッキーにおいて山に持ち込まれた。それを今度はアラスカのような、より大きな山で試すようになり、そのままヒマラヤに応用されている。ヨーロッパアルプスがアルピニズムの実験場であるならば、アラスカはエクストリームアルピニズムの実験場であるのだ。

## 5. 我々は何をすべきか

自らの登攀をアラスカで完結させるか、それともより大きな山へのステップとするか。それは、アラスカに登るにあたってそれほど重要な事ではないと思える。アラスカにおける一つの登攀それ自体が既に完璧なアルパインクライミングとして成立するからだ。しかし、ヒマラヤなどより大きな山を目指す者にとっては、アラスカは完成されたトレーニング場を提供してくれるだろう。日本の山からいきなりヒマラヤへ。それはそれで構わないが、もっと経験を積めば、よりヒマラヤで楽

## 2. リポート

しめるだろうに、とってしまう。ヒマラヤを登った事のない私が言うのは明らかに説得力に欠けているのだが、ヒマラヤは本気の山、より良いスタイルでカッコ良く登りたい。その為他の山域で経験を積む事は決して苦にはならない。ましてや、トレーニングと位置付けているその登攀自体が自分を苦しめ、楽しませ、そして強くさせてくれるのだから。ヒマラヤでは資金の負担も大きい事だろうが、アラスカなら30万円で充実の登攀を実践できる。南米はもちろんの事だが、金のない学生には特に、ヒマラヤ以外にも良い山は沢山あるのだと強く言いたい。

では、アラスカでの登攀に向けてどのような準備をすべきかを考えてみたい。アラスカの先に何したいのかが見えていれば、アラスカですべき事は決まってくるだろうし、アラスカで最高の登攀がしたいのであっても、何をやるか、その目的は絞ったほうが良いだろう。ビッグウォールもあればミックスクライミングもある。縦走や冬季登山はまだまだこれから、といった感じだ。同じミックスクライミングの同じアラスカグレード6でも、ハンターのムーンフラワーバットレスとフォーレイカーのインフィニットスパーでは全くタイプが違う。前者はテクニカルなクライミング、後者はどちらかと言えば体力勝負のクライミングである。もちろん、両者を兼ね備えたルートもあり、どちらにも共通しているのは山の大きさを全身で感じられる事、体力、スピード、精神力が必要で、山の変化に迅速かつ冷静に対応できる能力が必要な事である。アラスカでやる事が決まれば、日本で準備する事もおのずと決まってくる事と思う。ここで、日本のチンケな壁を登ってアラスカのトレーニングになるのだろうか、という思いを抱くかもしれない。しかし、イギリス人達を見ると、

大して大きな岩場があるわけでもないのに(実際行った事はないが)、アラスカやヒマラヤであれだけの登攀を実践している。彼の国では、クライミングに対する確固たる倫理、信念があり、小さな壁から大きな山に繋がられるだけのシステムが確立しているように見える。また、世界的クライマーであるスロベニア人のマルコ・プレゼリは、前述の2002年の登攀が初めてのアラスカだったそうだ。それで何故あれだけ登れるのか。その理由は、決してそれまでのヒマラヤ経験によるものだけではないと私は思う。彼のプロフィールを読むと、祖国スロベニアで数え切れないほどのフリー化、初登攀を行なっている。ヒマラヤは登れても、アラスカの難しい壁は登れない(違っていたらごめんなさい)。ホームグラウンドとしている自分の国でどれだけの登攀ができるかが、その後の海外における登攀の成否を分けるのではないかと考える。

前置きが長くなったが、日本で最も海外の山に近い登攀を実践できるのは、ありきたりであるが冬壁だと思う。烈風にさらされ、登攀を続ける体力、精神力は、やはりゲレンデでは養えないし、スピードアップのために何が必要なのかも教えてくれる。21世紀のアルパインクライミングのトレーニングだからといって、5.14やM10のルートを目指しても、それだけでは役に立たない。意外と古風なのかもしれないが、パチンコを始めとする継続登攀というのは、合理的なトレーニングであると思う。ただし、何らかの付加価値を付ける必要がある。長時間かけて簡単なルートや人工登攀ルートを繋げるのではなく、スピード、フリー、プロテクションを意識しながら登る事が大切だろう。これは継続登攀でなくても、一本登る時においても意識すべき事と思う。

スピードを意識する事は、単純に登攀スピードのアップが目的であるし、自分を追い込む事も出来る。フリーの意識は、より困難の追求である。A1の入るルートを冬季フリー化を狙って登るのは、それ自体の価値も大きく、充実した登攀となるだろう。基本的にアックスとアイゼンを使用時のクライミングとなるが、これにはスポーツミックスクライミングのトレーニングが有効だ。プロテクションを意識する事に関しては、「残置支点を無視する」に尽きる。海外のルートに行けば、残置支点は皆無に等しい。自分でプロテクションを作れなければ、海外の山に登る資格はないだろうし、ひいては日本の山に登る資格もない。

また話が逸れるが、結局のところ、日本人が世界的に見て誇れる登攀をあまりできていない原因は、残置だらけの日本の壁にあるのだと思う。残置があるなら、逆にフリーで挑む等、やるべき事は沢山あるはずなのに、それこそIV級、A1のまま、冬でも「悪い」の一言で済ませる曖昧さが邪魔をしているのではないだろうか。いずれにせよ、残置支点を抜いてしまわないまでも、無視する事は簡単にできるし、残置無視の登り方が広く浸透すればと思う。簡単なルートでも非常に楽しめるようになるし、一度登ったルートでも二度美味しいのである。

そう考えると、日本の壁も捨てたものではない。冬にやる課題もまだ沢山ある。自分の目的に合わせて、ハードルを高くも低くもできる。錫杖などでは残置無視は比較的容易にできるだろうし、フリーで登るのも無理がない。谷川でも穂高でも可能性のあるラインは沢山ある。唐沢岳幕岩等では、残置は使用したとしても極力フリーを意識しての難しい登攀が行なえるだろうし、日本各地に、もっとフリーを意識した冬期登攀ルートが拓かれて

も良いと思う。ルート図を持たずに現場でラインを決めて登れば、未知の壁に登る気分が味わえるかもしれない。

その中でも最も勧めたいのが、穂高の継続登攀である。剣岳に比べれば天候に左右される事も少なく、スピード、フリー、残置無視の全てを意識して山に登れる。ただし、縦走路でペンキや鎖までも無視しようとすれば、はるかに辛いものとなるだろう。それは各自のルールで決めれば良い事だし、非常に充実した登攀になることと思う。私は、細かい変更を加えながら、穂高の様々な場所で五回トライしているが、計画通りに山行を終えられた事は、残念ながら一度もない。ある部分においては、アラスカよりも厳しい面が多々ある。工夫を重ね、面白い組み合わせはいくらでも作れよう。

さて、実際にアラスカに行ったら、自分の求めているもの、それを具現化できるルート、また、理想を体現しているクライマーに気を配るべきだろう。世界のアルパインクライミングの中心とも言えるこの山域では、我々が求めるほぼ全てのクライミングを実践できる。アラスカに向かう前、私は坂下直枝氏から「デナリ南壁だけはヒマラヤと思え」との助言を受けた。それだけ大きな山、壁がある。折角なのだから楽しむだけでなく、もう一步踏み出してステップアップを目指しても良いのではないだろうか。まず、とにかく良く山を見るべきだろう。ルート図を眺めるのではなく、ルート図と壁を見比べるでもなく、山を舐め尽くすように見つめるべきだ。これはアラスカに限った事ではない。日本で決めていたルートに何が何でも行く、それはもちろん大切な事かもしれないが、もっと楽しくて大切な事は、「目の前にある山」が差し出してくれるものに可能性を見出し、

## 2. リポート

挑戦する事だろう。山を眺めて、視線の止まるラインがあればしめたものだ。駄目元でも行ってみればいい。もちろんトポはベースキャンプに置い

て。そのラインは世界の山々の魅力的なラインに繋がっているかもしれない。そんなクライミングを堪能できる場所、それがアラスカである。